

「しぐれ」小考

森脇茂秀

0、はじめに

日本語には自然を表わす語彙が多いという。このことは日本の自然が変化に富んでいることと、日本人が自然に親しみ、強い関心をもって来たことを意味すると考えられる。そこで本稿では、古典文学作品中に用いられた自然を表わす語彙の中で「雨」に関する語彙を概観し、その中で、特に「しぐれ」という語を取り上げて考察することにする。

1-1、日本古典文学作品中の気象のことは

ば、意義分類の「(水・乾湿) (気象) (雨・雪) (天気)」を抽出したところ、異なり語数全34180語中、17語であった。勿論同書に採録された語の全体の性格を考へる必要があるだろうが、これら気象のことは、全体の1%にも満たない。

また、大野晋 (1969) 「基本語彙に関する二、三の研究」で、万葉集・枕草子・源氏物語・徒然草と類聚名義抄 (観智院本) の和訓と照合した結果、四作品に共通する名詞としてあげられているものは、368語であり、その中に「雨」や「水」は含まれているが、今回問題にしようとする「しぐれ」はその中に含まれていない。「雨」「しぐれ」の作品毎の用例数を示すと、次のようになる。

宮島達夫 (2014) 「日本古典対照分類語彙表」によれ

あめ(雨)

合計	360
徳松	6
平家	18
宇治	16
1	1
新古	23
大鏡	9
更級	9
1	1
紫	42
源氏	53
枕	43
蜻蛉	20
隆興	8
土左	14
古今	12
伊勢	
竹取	
万葉	85

しぐれ(時雨)

合計	130
徳松	
平家	1
宇治	
方丈	
31	
新古	
大鏡	15
3	
更級	
17	
紫	
16	
源氏	
14	
枕	
蜻蛉	
隆興	12
1	
土左	
古今	
伊勢	38
竹取	
万葉	

1-2、日本語の中の「気象・季節」

日本の「気象」における、文学的アプローチとしては、早く高橋和夫(1978)『日本文学と気象』が、次のように指摘している(以下、傍線は稿者)。

気象とは、大気運動の諸現象のことであり、気候とは、その配置された相のことであり、季節とは、その年変化のことであると言ひ直すことができる。これからの古典研究では、ただ書物に単語として目につく季節だけに目をやるのではなく、広く気候について、そしてさらに

は気象全般にわたつての理解の上に、古典のすがたを、現代の私たちの目から再発見する必要がある。そういう学際的研究が、新しい研究のテーマと成果をもたらすのではないだろうか。

また、「自然関係の語彙」「気象・季節を表わす言葉」に対して、日本語学的アプローチとして、金田一春彦(1988)『日本語 新版(上)』では、次のように指摘している。

雨に関する語彙

(略) 雨の種類を表わす単語が多いのは当然で、「春雨」「五月雨」「夕立」「時雨」「菜種梅雨」「狐の嫁入り」(日照り雨のこと)、最近はまだ「集中豪雨」とか「秋雨前線」とかいうのもあり、日本が雨のよく降る国であることを表わしている。J・スワードは、日本語の雨の名は四〇を越すと言つて驚いている。

このうちの「春雨」はまだいいが、「五月雨(さみだれ)」とか「時雨(しぐれ)」は難しい漢字の宛て方をす

る。これは昔、日本人は和語を何でも漢字で書こうとした。「雨」は中国でも降るから「雨」という漢字はあるが、「五月雨」「時雨」にピッタリの中国語はないので、適切な漢字がなく、その意味を考えて、「さみだれ」とは「五月に降る雨だ」とか、「しぐれ」とは「時どき降る雨だ」とか解釈して漢字をあてたものだ。

こういうふうであるから、雨の種類だけでなく、一般に雨に関係する語彙も日本語には豊富である。たとえば「雨間（あまあい）」「雨脚（あまあし）」「雨やどり」「雨こもり」「雨曇り」「雨垂れ」……というような単語がある。これを英語で言おうとすると、みんな単語では言えない。「雨やどり」などは、日本ではごく普通の言葉であるが、taking shelter from the rain となってしまう。「雨天順延」という言葉を英語に訳すと長くなるというものも、この線に沿った事柄だ。その男（女）と一緒にいくと必ず雨に逢う男（女）のことを「雨男（女）」と言うが、こういった言葉は他の国の言語の発想にはなさそうだ。

四季の変化

さきほどの「五月雨（さみだれ）」や「梅雨（つゆ）」という言葉に注意していただきたい。この語は両方とも同じ雨をさすが、「五月雨」の方は「五月雨が降る」とか「五月雨がやむ」とか言う。それに対して、「梅雨」の方は「梅雨に入る」「梅雨があける」と使う。つまり「五月雨」の方は雨そのものをさすが、「梅雨」の方は、五月雨が降る時季を言う言葉なのだ。これはやはり雨が、ことに「五月雨」が日本人にとって重要だということを表わしている。

ところで日本語では、「春の雨はシトシト降る」とか、「夏の雨はザーッと降る」とか言う。秋から冬にかけて降る「時雨」という雨は「シヨボシヨボ降る」と言う。つまり降り方がそれぞれ違う。

「時雨」という言葉は辞書では、「秋から冬にかけて降ったりやんだりする雨」とだけしか書いてないが、われわれがこの言葉を聞くと、雨の降り方以外に、肌寒い感じ、山の本の葉が紅葉することを連想する。昔の人は、奥山

で雄の鹿が雌の鹿を慕って鳴く声なども一緒に連想したはずで、そういったことから、一つ一つの雨の名前は、それぞれわれわれに豊かな連想を呼び起こす。このことから〈俳句〉という、世界で一番短い形の詩が日本に出来ている。

この金田一(1988)の指摘は、新書版でもあり、概説的記述であるが、「気象・季節を表わす言葉」を考察する上でも、「しぐれ」という語を考察する上からも極めて示唆的である。

2. 「男心」と秋の空

ここで「秋の空」を考えてみたい。現代語において、通常「秋の空」は「秋晴れ」や「天高く馬肥ゆる秋」に代表されるように、青々と澄んで晴れわたっている様子や快晴を指す。ところが、「男心」と共に用いられた「男心と秋の空」の場合は、「心の変わりやすいことのとえ」

〔広辞苑〕第6版(2008)とか、「秋の空が変わりやすいところから、それと並べて、男の心が変わりやすいことをいう。」〔日本国語大辞典 第二版〕とあるように、「秋の空」は「変わりやすい天気」の意と考えられるであろう。また、「日本国語大辞典 第二版」は、次のような用例を採録している。

「男心と秋の空と、たとへのごとく竹次郎は、またお若がことは忘れて、通ひ路も疎(うと)くなり」

(人情本・恋の若竹〔1833〕39)中・二二套
「たとへにさへ男心と秋の空、今まであんな宜(い)い
天氣が急に泣出しさうな空になって来た」

(人情本・春色江戸紫〔1864〕68頃)二・二二回

これらの用例からすると、「男心と秋の空」ということわざは、近世後期に成立したようである。

また、近年では、「男心と秋の空」ではなく、「女心」という」と注記した辞書もある。

「男性の女性に対する愛情が変わりやすいこと。「男心と——」／男性の立場からこれをもじって「女心と——」ともいう。」〔明鏡国語辞典〕初版(2003)

「男心」から「女心」への変化は、現代社会における、男性、女性が占める社会的地位の変容等とも関連するであろうが、英語のことわざからの影響もあるのではないかと、この指摘もある(注1)。

A woman's mind is always mutable. (女心は変わりやすい)

A woman's mind and winter wind change often. (女心と冬の風はしょっちゅう変わる)

では何故青々と澄んで晴れわたっている様子である「秋の空」が、変わりやすい、となるのか。このことについて、金田一春彦(1973)『ことばの歳時記』の10月29日に、「京都あたりだとほんとうに秋の空は変わりやすい。」との指摘がある。また、『日本国語大辞典 第二

版』には、「きたやましくれ」「北山の雨」という語形が採録されており、次のようである。

きたやましくれ【北山時雨】

①北方の山から降ってくるしぐれ。特に、京都の北山のあたりから降り渡るしぐれ。〈季・冬〉*清元・三社祭(1832)「北山時雨ぢやないけれどふられて帰る晩もあり」(森脇注：天保3年(1832)に江戸中村座で初演。浅草の三社祭。清元節：三味線音楽の一流派。一般には単に「清元」と呼ぶ。富本節から派生した浄瑠璃。広義の豊後節の一派。浄瑠璃の流派としては最後に生れたもの。)

②「北」に「来た」をかけていうしゃれ

(イ)こちらの思惑とおりになつていくこと。*洒落本・契情買虎之巻(森脇注：けいせいいかいとらのまき：洒落本。1冊。田螺金魚(たにしきんぎよ)作。安永7年(1778)刊。遊女瀬川と客五郷との悲恋を描く。人情本の祖とされる。江戸後期の小説の一形態。書型から滑稽本とともに中本と呼ばれた。)(1778)「そりやそろそろと、きた山しくれのあいつが在所を尋るは、やっぱり五きやうを

尋るのだ」

(ロ) 気があること。

(ハ) 空腹を催すこと *歌舞伎・傾情吾嬬鑑 (1788) (森脇注)・けいせいあずまかみ・初演 天明2 (江戸・中村座) (「成る程、腹の加減も北山時雨 (キタヤマシグレ)、ちよつと一杯茶漬けと出かけよう」)

③ きまぐれ。

(日本国語大辞典 第二版)

○北山の雨

北山のあたりからふってくるしぐれ。転じて、きまぐれ。北山時雨。*雑俳・柳樽多留拾遺 (ざつぱい・やなぎだるしゅうい)・川柳集。一〇編。編者未詳。一七九六〜九七年刊の「古今前句集」を改題したもの。古今和歌集に倣った類題川柳句集。(1882) 卷一七「北山の雨にたとへし人こころ」 (日本国語大辞典 第二版)

「北山しぐれ」や「北山の雨」が、「京都」の北山を指し、しかもその「しぐれ」「雨」は、きまぐれと転ずるように「変わりやすい天候」を表している、と考えられる。また、「清

元・三社祭」、「洒落本」、「歌舞伎・傾情吾嬬鑑」等にあらることから、この「変わりやすい天候」であるという「北山」が広く理解されており、東の江戸でも「北山しぐれ」が用いられていたと考えられるであろう。

・男心と秋の空と、たとへのごとく竹次郎は、またお若がことは忘れて (略)

(人情本・恋の若竹 (1833—39))

したがって、「男心と秋の空」は、「京都」(の天気)を基準として生まれたものであり、天気用語の源泉は、京都の盆地特有の気候からもたらされたものであると考えられる。「しぐれ」が「変わりやすい」という点から、つぎのような語源説も生じている (注2)。

従つてこの現象に対して、これは、雨を持つてゐる雲が一過すること、即ち一しきり過ぎるところから、スグレ、スグレ、即ち過ぎ行く通り雨といふ風に解釈するのが一番いゝと感ずるやうになつた。(新村出 (1950))

3、文献に表れることは

—各作品中の「しぐれ」の用例—

2、では、「北山しぐれ」や「北山の雨」が「京都」の北山を指し、しかもそのしぐれ、雨は「きまぐれ」と転ずるように「変わりやすい」天候を表していることを指摘したが、ここでは、更に「しぐれ」自体の語史を考察することにする。

3-1、古辞書の「しぐれ」

まず、古辞書に表れた「しぐれ」の用例を挙げる。

霖 志久礼 又三曾礼 (新撰字鏡 一 16才 5ウ)

雹 志久礼 又阿良礼 (新撰字鏡 一 17才 5ウ)

霰 志久礼 小雨也 (和名類聚抄)

霰 之我反 小雨 (篆隸万象名義)

霰 シクレ (観智院本類聚名義抄)

法下 七〇 1)

まず「新撰字鏡」にあらわれた「しぐれ」の和訓は、「みぞれ」や「あられ」と併記されていることを指摘できるが、「和名類聚抄」「篆隸万象名義」に採録された「霰」には、「志久礼」の訓と共に、「小雨」「小雨也」とあり、「しぐれ」が、「こまかく降る雨」や「細雨」を指すものであると考えられる。

さらに時代が下り、「日葡辞書」には次のような記述がある。

Xigure. シグレ (時雨) 冬や秋の雨 (日葡辞書 764)
Xigure.rueta. シグレ、ルル、レタ (しぐれ、るる、れた)
冬や秋に雨が降る (日葡辞書 764)

「日葡辞書」では、名詞として用いられた場合は、「冬

「や秋の雨」、動詞「しぐるる」の場合、「冬や秋に雨が降る」とある。「新撰字鏡」「和名類聚抄」と比べて、「日葡辞書」になると、「冬や秋」という「季節」としての「時季情報」が付加されている点は、注視される。

3-2、上代文献における「雨」に関する語彙

上代文献における「雨」に関する語彙を調査したものであるが、井上さやか(2005)「上代語彙としての「しぐれ」がある(次表参照)。

古事記	雨(アメ)、暴雨(ハヤサメ)、大雨(オホキアメ)、水雨(ヒサメ)、大水雨(オホヒサメ)、阿米(アメ)、阿佐阿米(アサアメ)
日本書紀	雨(アメ)、微雨(コサメ)、大雨(ヒサメ)、甚雨(ヒサメ)、風雨(カゼアメ)、霖雨(ナガメ)、雪雨(ユキアメ)、時雨(ジウ)、淫雨(インウ)、甘雨(カンウ)、陰雨(インウ)
風土記	立雨(アメ)、風雨(カゼアメ)、霖雨(ナガアメ)、立雨(タチサメ)、波夜佐雨(ハヤサメ)
懷風藻	雨(ウ)、行雨(カウウ)

万葉集 12例	春雨(春雨) 20、村雨(村雨) 1、霖霖雨(ナガアメ) 2、小雨・霖・鷲霖(コサメ) 7、春之雨(ハルノアメ) 3、秋之雨(アキノアメ) 1
------------	---

この中で、「時雨」と表記しているものがあるが、この「時雨」は、「ほどよい時に降る雨。時を得て降る雨。」の意で、「ジウ」と字音読みし、「しぐれ」ではないことが指摘されている。

よって、本稿もそれに従い、上代の「しぐれ」は、「万葉集」に用いられたもののみを確例として扱う。

また、井上さやか(2005)は、「しぐれ」の意味を、

「シグレの雨」という例が示すように、シグレとは本来は物が密集する様子を表す語であったと考えられる。それが、秋の歌でシグレの雨として表現されたことから、シグレだけで特定の雨を意味するようになったと考えられる。

と指摘している。確かに「日葡辞書」には、

Xiguraiōta.シグライ、ウ、ウタ（しぐらひ、ふ、うた）
物がびっしりと密集する

Xigurami.muōda.シグラミム、ウダ（しぐらみ、む、うだ）
同上
（日葡辞書 764）

とあるが、「和名類聚抄」「篆隸万象名義」に採録された
「衆」には、「志久礼」の訓と共に「小雨」「小雨也」とあり、
本稿では、「和名類聚抄」「篆隸万象名義」の記述を重視
し、「しぐれ」の原義は「こまかく降る雨」であると考
えたいと思う。

また、「しぐれ」を「時雨」と表記する例は、近世期
まで見られないようである。

時雨 シグレ 霽 シグレ
（『下学集』（元和三（1617）板）

（主・客人）へ時雨の雨にぬれじとて、く、驚のはし
をわたひた、（大藏虎明本狂言集1642（寛永19書写）

せんじ物 上 117頁）

なお、この「大藏虎明本狂言集」の用例について「大藏
虎明本狂言の研究 本文篇」「頭注」には、「この囃子物、
特別な意味があるわけではない。二つの山の谷あいに橋
をかけた山鉾（＝「カササギノ鉾」と称シ、著名）を作
り、その橋をかささぎの橋に見立ててはやすのである。
「かささぎ」は、七夕の夜天の川に翼を広げて橋を作り、
牽牛と織女を会わせるといふ。ここは「かささぎ」に笠
を掛け、「雨にぬれじ」といったものか。当時流行した
囃子物の一つで、石見津和野鷺舞の歌にも、ほぼ同じ内
容の歌詞が残る。」とあり、この歌が広く流行したこと
を伺うことができる。

3-3-1、万葉集の「しぐれ」

「万葉集」中、「しぐれ」は38例用例が存する。この用
例について、村田正博（1977）は次のように二つに分類
する。

(i) 黄葉の色を深めたり散らしたりするもの 季節歌

(1) しぐれ (鍾札) の雨間 (ま) なくし降れば御笠山

木末あまねく色づきにけり (万葉集 八 153)

(2) 大君の御笠の山の黄葉 (もみちば) は今日のしぐれ (鍾札) に散りか過ぎなむ (万葉集 八 154)

(ii) 配偶者と離れてあるわびしさ 羈旅

(3) 秋田刈る旅の處りにしぐれ降り我が袖濡れぬ干す

人なしに (万葉集 秋雑歌 羈旅 十 228)

(4) 十月しぐれの雨に濡れつつか君が行くらむ宿か借らむ (万葉集 羈旅 十一 321)

「万葉集」の「しぐれ」は、村田正博 (1977) で示されたように、(i) は「黄葉」、(ii) は「雨にぬる」との関係で捉えることができる。このように分類したときに、雨によって起こる現象である「しぐれ降る」は例であり、他に「しぐれに散る」「しぐれに濡る」「しぐれにあふ」「しぐれに競ふ」等が見られる。

(5) 時待ちて降れるしぐれ (鍾札) の雨やみぬ明けむ

朝か山のもみたむ

(万葉集 秋雜・市原王・八 156)

(6) 君が家の黄葉は早く散りにけり しぐれ (四具札) の雨に濡れにけらしも

(万葉集 秋雜・詠黄葉・十 221)

(7) 九月のしぐれ (四具札) の雨の山霧のいふせき我が胸誰を見ばやまむ「云 十月しぐれの雨降り」

が胸誰を見ばやまむ「云 十月しぐれの雨降り」

(万葉集 秋相・奇雨 十 228)

(8) 十月しぐれ (鍾札) の雨に濡れつつか 君が行くらむ宿か借らむ

(万葉集 問答歌 十一 321)

(9) 九月の しぐれ (四具札) の時は 黄葉を 折りか わらわむ (万葉集 三 423)

『日本大百科全書』(小町谷照彦) には、「万葉集」には40例近くみえ、巻8や巻10では秋雑歌(ぞうか)に位

置づけされており、「九月（ながつき）のしぐれの雨に
濡（ぬ）れ通り春日（かすが）の山は色づきにけり」（巻
10）など、秋に重点を置きながら、紅葉（万葉では黄葉）
を染めたり散らしたりするものと考えられていた。「時
雨」という用字はまだなく、平安時代に入ってからのも
のらしい。」と指摘しているが、「時雨」という用字は
近世期からであることは、前に述べた通りであり、「秋
に重点を置きながら、紅葉（万葉では黄葉）を染めたり
散らしたりするもの」というような指摘は、一般的な理
解であると思われる。

また、内田賢徳（1983）では、次のように「しぐれ」
を指摘する（纏めて示す）。

・「鍾礼」は、時、つまり黄葉のときにあたって降るに
わか雨といった意味を抽出する。

・やはり、和歌の中でもみぢに対して時を得た雨という
把握が一般的になることによつて、「時雨 シグレ」は
成立しただろう。そして、より反省的には、時を教える
雨ということである。

ここでも「黄葉のときにあたって降るにわか雨」、「もみ
ぢに対して時を得た雨」によつて「時雨 シグレ」は成
立したとする。また「しぐれ」は、「雨という把握が一
般的になる」という「一定の時間」を想定している。

3—3—2、巻一・八二の「しぐれ」はどこが古態
なのか

ここで「万葉集」中の「しぐれ」の用例の中で、かね
てより問題となっている歌がある。

(10) 「題詞」(和銅五年壬子夏四月遣長田王子伊勢齊宮
時山邊御井^へ作^り歌)

うらさぶる心さまねしひさかたの天のしぐれ(四具礼)
の流らふ見れば

(左注) 右二首今案不似御井所^へ作^り 若疑當時誦之古歌
歟 (万葉集 一 82)

「しぐれ」は「秋」の雑歌として、また「九月のしぐれ」「十月しぐれの雨」などのように「秋から初冬」のものであるが、(10)の題詞には「夏四月」とあるのである。

この当該箇所和歌について、例えば、武田祐吉『萬葉集全註釋』は、「しかるに題詞には夏四月とあつて、この詞に合わない。興に乗じて他の歌を吟詠したのであらうとされる所以である」とし、澤瀉久孝『萬葉集注釈』は、「萬葉ではしぐれは主として晩秋のものとして扱われ、古今以後は初冬のものとして扱はれてゐる。」とする。伊藤博『萬葉集釈注』は、「三首のうち、題詞にふさわしいのは、八一のみで、八二は季節があわず、八三は、立田山の西にいて詠まれた趣である。左注にいう通りであるかもしれず、また長田王の歌として知られた歌が一括してあつたものかもしれない。」と指摘したり、『新日本古典文学大系 萬葉集』も、「しぐれ」は秋冬の雨であるから題詞の季節と合わない。左注は八二・八三について「御井の歌とは思われない、当時の古歌か」と疑っている。それならば作者不明の古歌となる」と指摘する。このようにいづれにしても注釈書では、「しぐれ」の「時

季」と題詞の「夏四月」と整合性が欠けているとし、それを問題にしているのである。

確かに、後世になると、「しぐれ」は、

(11) 雨 さみだれ、しぐれ、くして、しづく、まつね
にまといふ。(略) 秋は、きり、ひぐらし、はつかり、
しぐれ、紅葉、鹿の音。(略) 十月の雨をば、しぐ
れといふ。(能因歌枕)

(12) 秋ノ体也。シグレカナンソザット一フリフツテス
ギタ山家ノ体ゾ (風月集抄)

(13) 神無月降りみ降らずみ定めなきしぐれぞ冬のはじ
めなりける (後撰和歌集)

のように、「しぐれ」は、「主として晩秋から初冬にかけての、降ったりやんだりする小雨」、「秋」から「冬」にかけて降る時季が特定されていると捉えるべきであろう。また、「萬葉集」中の「しぐれ」の用法として、「黄葉」

と共に、「黄葉のときにあたつて降るにわか雨」や「配偶者と離れてあるわびしさ」を表す用法とに大別することは前述の通りである。

ここで古辞書の記述を再び考えたい。3—1、でも述べたが、「和名類聚抄」「篆隸万象名義」に採録された「霰」には、「志久礼」の訓と共に「小雨」「小雨也」とあることから、「しぐれ」は、「こまかく降る雨」や「細雨」であると考えられることは既に述べた通りである。そこで「しぐれ」の原義を考えるに、この「しぐれ」自体、雨が降る時季を限定したものではなく、「こまかく降る雨」と、雨そのもの、乃至は「雨」の種類のみを記述したものが原義であると捉えることもできるのではないかと考えられるのではないか。例えば、金田一春彦（一九八八）は、「五月雨」と「梅雨」との関係について、「五月雨」の方は雨そのものをさすが、「梅雨」の方は、五月雨が降る時季を言う言葉なのだ」と指摘するが、「しぐれ」の原義が、「和名類聚抄」「篆隸万象名義」に表れる、「小雨」、すなわち「こまかく降る雨」と、雨自体そのものを指すものであると考えれば、「左注」の「当

時の古歌か」とする記述と上手く符合するように思われる。よって、万葉集八二の「しぐれ」は、「こまかく降る雨」と、雨自体そのものを意味する原初的用法が表出したものとして捉えることで「題詞」との関係が説明できるであろう。

4、おわりに

以上、万葉集の「しぐれ」を中心に考察を試みた。中古以降、「しぐれ」は「我が袖にまだき時雨の降りぬるは君が心にあきや来ぬらむ」（古今集 恋5）のように「涙」の比喩として詠まれるようになったり、「しぐれの音」と「音」と共起した例が見られるようになる。「新日本古典文学大系」脚注には、「万葉集の「しぐれ」は常に寂しく降る情景であり、視覚の景である。作者が「しぐれ」の音に耳をすました歌を詠むようになるのは平安時代以降である」とあり（三木雅博（1983）、「しぐれ」は「音」と共起する用法が見られるようになることを指

摘している。更に、中世期には「うちしぐる」と、動詞として用いられている用例もあるが、これらの変遷過程については、また稿を改めて論じたいと思う。

こ教授賜れば、幸いである。

〔尚〕本文は「源氏物語」は小学館『日本古典文学大系』、その他は岩波書店『新日本古典文学大系』に依った。また、必要に応じ、各種索引、注釈書を利用した。

〔注〕

〔注1〕例えば「本当は男だった!?」「女心と秋の空」

(<https://allabout.co.jp/gm/gc/220725/2/>) 等参照。

〔注2〕この語構成については、ここでは保留する。

〔参考文献〕

井上さやか (2005) 「上代語彙としての「しぐれ」」(『万

葉古代学研究所年報』(3))

内田賢徳 (1993) 「萬葉しぐれ考」(『ことばここのは』

第十集 後『上代日本語表現と訓詁』所収)

大野晋 (1956) 基本語彙に関する二・三の研究(『国語学』

24 後『文法と語彙』所収)

金田一春彦 (1973) 『ことばの歳時記』(新潮文庫)

金田一春彦 (1988) 『日本語 新版(上)』(岩波新書)

佐々木優子 (1993) 「歌語「しぐれ」について―万葉集

及び八代集における時雨の歌の考察―」(『学習院大

学国語国文学会誌』36)

新村出 (1950) 「語源をさぐる」(『新村出全集 第四卷』

(1971) (筑摩書房) 所収)

高橋和夫 (1978) 『日本文学と気象』(中公新書)

三木雅博 (1983) 「聴雨考」(『中古文学』31)

宮島達夫 (2014) 『日本古典対照分類語彙表』(笠間書院)

村田正博 (1977) 「長屋王の歌」(『万葉集を学ぶ 第一集』

有斐閣)

【付記】本稿は、二〇一六(平成28)年十一月三日に別府大学で開催された「日本中世の雨と水―自然と文化とを繋ぐ回路を歴史のなかに探る―」というシンポジウムの中で、「気象のことば―しぐれ」と「つゆ」と―と題し講演したものの一部を纏めたものである。このよ

うな機会を頂き、浅野則子先生、田村憲美先生には感謝
申し上げます。また会場では有益なご意見を多数賜った。
銘記して感謝申し上げます。